

「サクラマス(下)」 海洋深層水で親魚養成

92万粒の卵を採取

富山県の河川で唯一サクラマス漁業が成立していた神通川の年間漁獲量は、明治40年代には160t前後あったものが、近年では1t前後まで激減した。絶滅の恐れのある野生生物の現状を記録した「県版レッドリスト」の希少種に指定されるまでになっており、資源の増大、回復が課題となっている。

サクラマスは川で生まれ、海で大きく成長して、生まれた川に戻って産卵するという生活史を持っている。水産試験場は水深15m前後の表層海水を取水しているため、夏場の水温が高くなり、冷水性魚類であるサクラマスの飼育が困難であった。

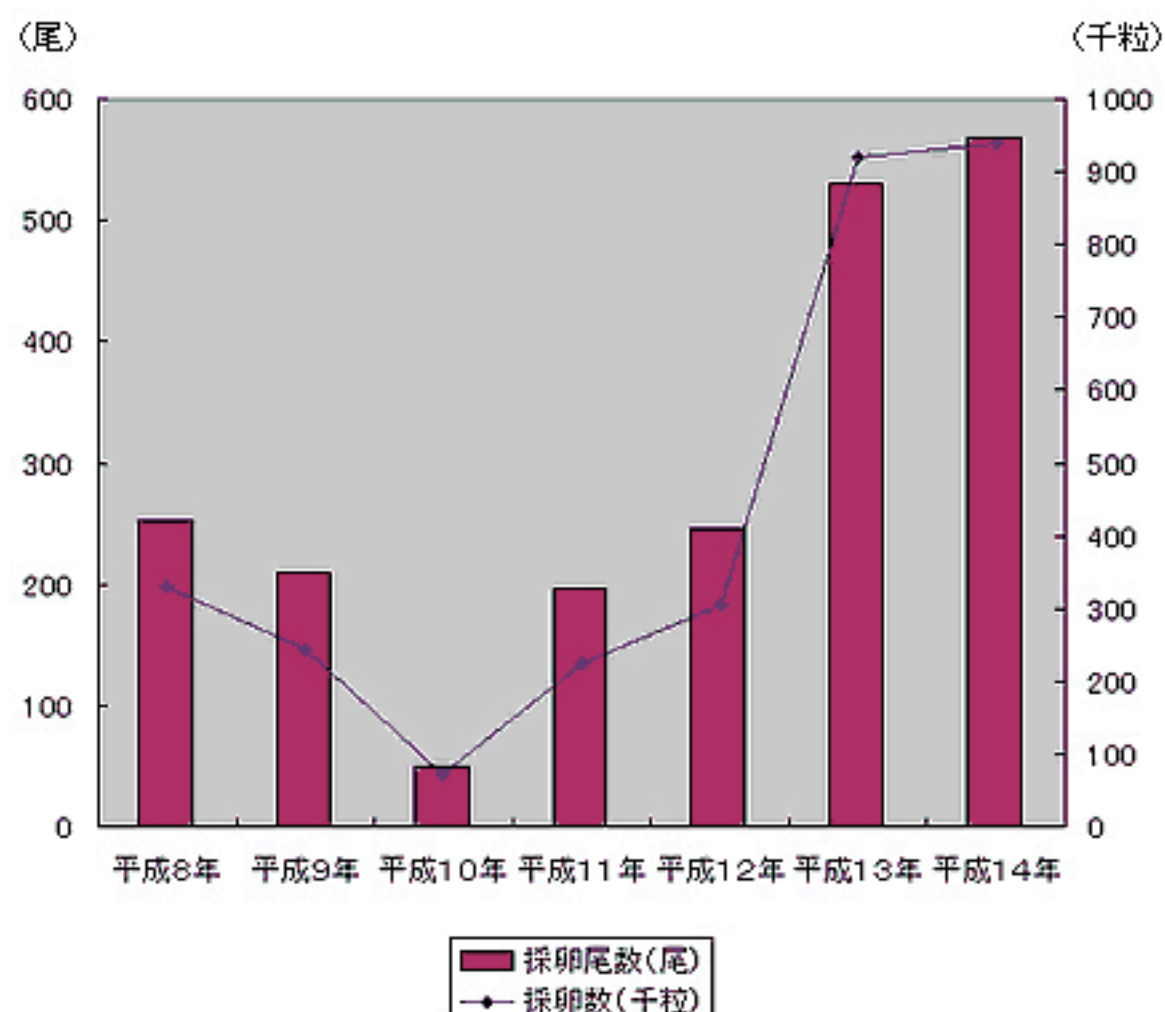
しかし、平成7年から水産試験場で海洋深層水(水温2~3℃)の採取が可能になった。採取した海洋深層水と淡水の井戸水(水温約17℃)を熱交換することで、サクラマスの飼育に適した水温約12℃の海水と淡水が1年を通じて得られるようになった。

現在では、サクラマス本来の生活史に沿った卵から親魚までの飼育が陸上の水槽でも可能となった。

7年度からは、人工ふ化放流量の拡大による資源の増大(回復)を目的に、種卵(しゅらん)の確保のための親魚養成技術の開発に取り組んでいる。8年度から開始した採卵では、年間20~30万粒の採卵数で、目標の100万粒を大きく下回っていた。

しかし、親魚候補の量的確保や魚病対策、えさの種類と成長およびふ化率の向上への取り組みによって、親魚の生残率の向上(数の増加)、大型化、1尾当たり採卵数の増加、ふ化率の向上などが図られ、13年度には目標に近い約92万粒の良質の卵を採取することができた。

今後は、種卵の安定的な大量供給を図るとともに、抱卵数の多い親魚の育成による採卵作業の省力化、生産経費の削減などによる生産性の向上が課題である。(小谷口 正樹・現水産漁港課)



海洋深層水を利用して養成したサクラマス親魚の採卵尾数と採卵数の変化